

薩摩守忠度は、いづくよりやかへられたりけん、侍
 五騎、童一人、わが身共に七騎取って返し、五条の
 三位俊成卿の宿所におはして見給へは、門戸を閉ぢて
 開かず。「忠度」と名のり給へば、「落人帰りきたり」とて、
 その内さわぎあへり。薩摩守、馬より下り、みづから
 高らかに宜ひけるは、「別の子細候はず。三位殿に申す
 べき事あって、忠度が帰り参って候ふ。門をひらかれずと
 も、このきはまで立寄せ給へ」と宜へば、俊成卿、
 「さる事あるらん。その人ならば苦しかるまじ。いれ申せ」
 とて、門をあけて対面あり。事の体何となう哀れなり。
 薩摩守宜ひけるは、「年来申し承って後、おろかならぬ
 御事に思ひ参らせ候へども、この二三年は京都のさわ
 ぎ、国々の乱、併しながら当家の身の上の事に候ふ間、
 疎略を存ぜずといへども、常に参り寄る事も候はず。
 君既に都を出でさせ給ひぬ。一門の運命はやつき候ひ
 ぬ。撰集のあるべき由承り候ひしかば、生涯の面目に
 一首なりとも、御恩をかうぶらうと存じて候ひしに、
 やがて世の乱いできて、その沙汰なく候ふ条、ただ一身
 の嘆きと存ずる候ふ。世しづまり候ひなば、勅撰の
 御沙汰候はんずらむ。これに候ふ巻物のうちにさりぬべ
 きもの候はば、一首なりとも御恩を蒙って、草の陰にても
 うれしと存じ候はば、遠き御まもりでこそ候はんずれ」
 とて、日ごろ詠みおかれたる歌どものなかに、秀歌と
 おぼしきを百余首、書きあつめられたる巻物を、今はとて
 うったたれける時、これをとつてもたれたりしが、鎧のひき
 あはせより取りいでて、俊成卿に奉る。三位これをあけ
 てみて、「かかる忘れがたみを給はりおき候ひぬる上は、
 ゆめゆめ疎略を存ずまじう候ふ。御疑あるべからず。
 さてもただいまの御わたりこそ、情けもすぐれて深かう、
 哀れもことに思ひ知られて、感涙おさへがたう候へ」と
 宜へば、薩摩守悦んで、「今は西海の浪の底に沈まば
 沈め、山野にかばねをさらさばさらせ、浮世に思ひおく
 事候はず。さらば暇申して」とて、馬にうち乗り、甲の緒
 をしめ、西をさいてぞあゆませ給ふ。

薩摩守忠度は、どこから帰ってきたのだろうか。侍五騎、
 童一人、自分とともに七騎で引き返し、五条の三位俊成
 卿の宿所にいっしょにご覧になると、門戸を閉じて開か
 ない。「忠度」と名のりつたところ、「落人が帰ってきた」と言って、
 宿所の中で騒ぎあっている。薩摩守は馬から下り、ご自分
 で大きな声でおっしゃるには、「特別に、これといったことはあ
 りません。三位殿にぜひ申し上げたい事があって、忠度が帰
 ってまいりました。たとえ門を開かなくても、この近くまでお立
 ち寄りください」と言うと、俊成卿は、「そういうこともあるだろ
 う。その人であれば問題はあるまい。入っていただきなさい」
 と言って、門を開けて対面した。その様子はどこがどうとい
 うわけではないが哀れである。薩摩守が言うには、「長年、和
 歌のことを教えていただいてからは、おろそかには思っておりま
 せんが、この二、三年は京都の騒ぎ、国々の反乱など、こと
 ごとく当家の身の上のことなので、歌道を投げやりにしたわ
 けではございませんが、いつもどおり寄せていただくことはかな
 いませんでした。帝はすでに都を出て行かれました。一門の
 運命は、すでに尽きました。勅撰集の撰集の計画がある
 うかがいしたので、生涯の誉れにたった一首でも、ご恩をこ
 うむりたいと思っておりましたのに、すぐに世間で戦乱が起き
 て、その計画も消えてしまいましたことを、ただわが身ばかり
 の嘆きと思っております。もし世の中が平穏になりましたら、
 勅撰集の撰集も進められるかと存じます。ここにございます
 巻物の中に、勅撰集にふさわしい和歌があれば、たとえ一
 首だけでもご恩をこうむって、草葉の陰でうれしいと思いま
 したら、あの世から末長くあなたをお守りいたしましょう」と言
 って、日ごろ詠んでいた和歌のうち、秀歌と思われるものを
 百首余り書き集めた巻物を、もうこうなった今は、と思って
 出立した時に、手に取って持ってきたが、鎧の右わきのひき
 あわせから取り出して、俊成卿に差し上げた。三位はこれを
 開いて見て、「このような忘れ形見をいただきました上は、決
 していい加減には思いません。疑ってはいけません。それにし
 てもただいまのご来訪こそ、情けもひときわ深く、哀れも格別
 と思われて、感動の涙をおさえることができません」と言うと、
 薩摩守は喜んで、「今となつては西海の浪の底に沈むなら
 沈め、山野に屍をさらすならさらせ、それでもかまわない。こ
 のつらい世の中に思い残すことはありません。ではお別れで
 す」と言って、馬に乗り、甲の緒をしめ、西を目指して進んで
 いった。

三位^{さんみ}うしろを遥かに見おくってたたれたれば、忠度の
 声とおぼしくて、「前途^{せんとほど}程遠し、思^{おもひ}を雁山^{がんさん}の夕^{ゆう}の雲^{うへ}に馳^は
 す」と、高らかに口ずさみ給へば、俊成^{しゅんぜい}卿いとど名残惜^{のきょう}
 しうおぼえて涙をおさへてぞ入り給ふ。

その後^よ世しづまって、千載集^{せんざいしゅう}を撰ぜられけるに、忠
 度のありし有様、いひおきしことの葉、いまさら思ひ出で
 て哀れなりければ、かの巻物のうちに、さりぬべき歌いく
 らもありけれども、勅勘^{ちよっかん}の人なれば、名字をばあらはされ
 ず、「故郷^{こきょう}花^{のはな}」といふ題にて、よまれたりける歌一首ぞ、
 「よみ人知らず」と入れられける。

さざなみや志賀の都はあれにしを

むかしながらの山ざくらかな

その身^{ちやうてき}朝敵^{あしたてき}となりにし上は、子細^{しさい}におよばずといひなが
 ら、うらめしかりし事どもなり。

三位はうしろ姿が遠く離れていくのを見送って立っている
 と、忠度の声と思われて、「前途程遠し、思ひを雁山の夕
 の雲に馳す」と、高らかに口ずさむので、俊成卿はますます
 名残惜しく思っ、涙をおさえて宿所に戻った。

その後、世の中が平穏になって、千載集を撰集するときに、
 忠度のあの日の有様、言い残した言葉、今改めて思い
 出して哀れだったので、あの巻物の中に、勅撰集にふさわし
 い歌はいくつもあったけれど、帝のおとがめを受けた人なの
 で、名字を隠し、「故郷花」という題で詠んだ歌一首を、「よ
 み人知らず」として入れた。

滋賀の旧都は荒れてしまったが、昔と変わらない

山桜が咲いているなあ

その身が朝敵となってしまった上は、とやかく言えるものでは
 ないというものの、うらめしいことである。